



福岡医発第1047号
平成24年 7月13日

各 医 師 会 長 殿

福岡県医師会
会長 松 田 峻一良
(公 印 省 略)

麻疹・風しん患者の届出について（お願い）

感染症法により麻疹及び風しんは、全数把握対象疾患となっております。臨床診断（疑似例も含む）で保健所への届出の上、麻疹については、資料1及び2のとおり、咽頭拭い液、血液、尿のPCR検査を実施（IgM抗体検査は疑陽性があるため）、風しんについては、血中抗体（PCR検査は望ましい）で確定診断を行っていただきますようお願いいたします。

麻疹は排除5ヵ年計画の最終年で、減少はしているものの、排除基準には今一步の努力が必要な状況です。福岡県内ではまだ報告はありませんが、国内で輸入麻疹が流行しており、地理的条件からも今後十分な監視が必要です。

また、風しんは、福岡県は昨年は86例で全国ワースト1でありました。本年は減少していましたが、全国的な急増（既に昨年発生例を超えている）に伴い、県内でも福岡市、北九州市や久留米市などで発生しています。幸いにも先天性風しん症候群の発生はありませんが、今後注意が必要です。

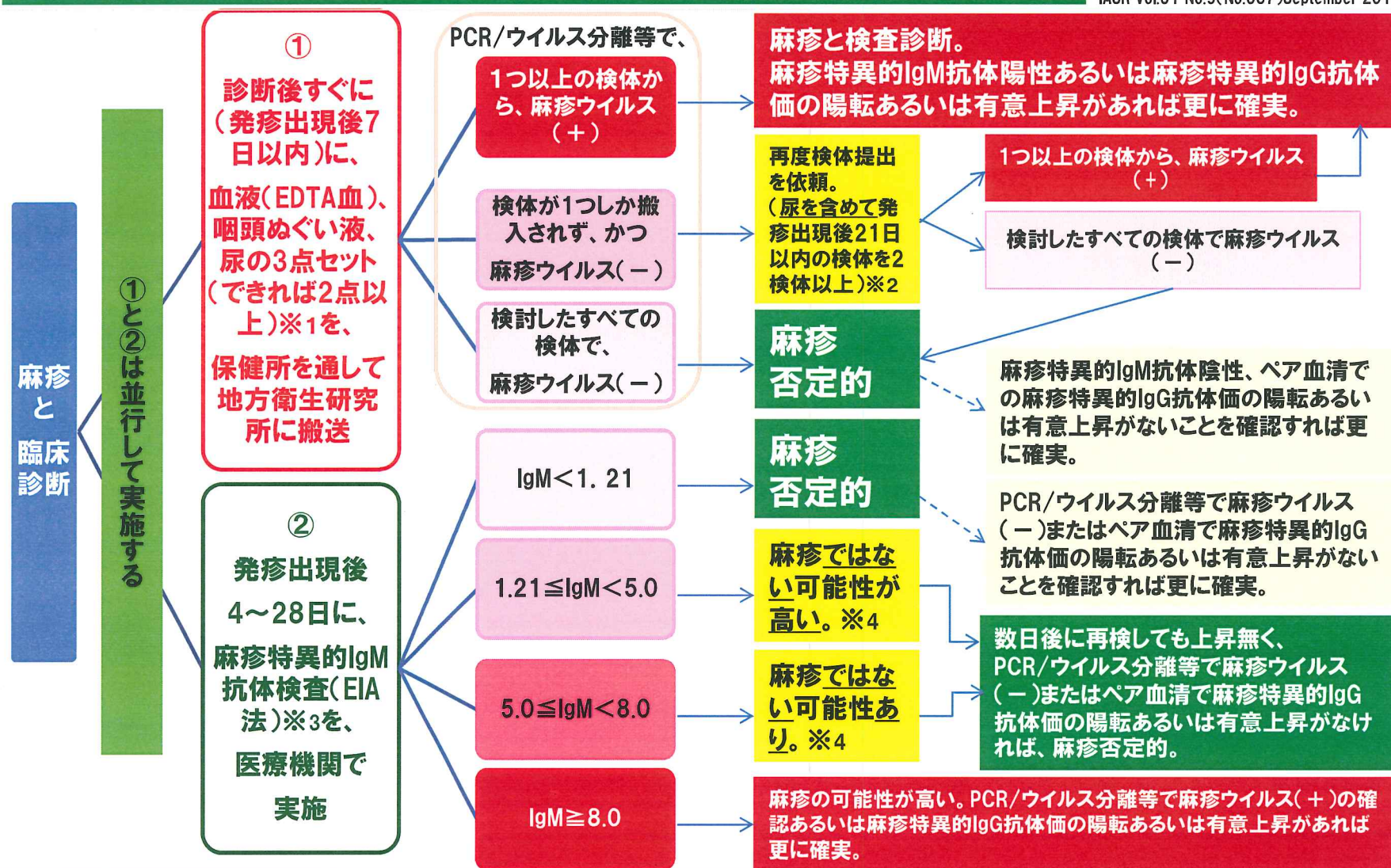
つきましては、貴会におかれましても本件についてご了知いただくとともに、貴会会員への周知徹底について貴職のご高配を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

小郡三井医師会より

感染症対策担当理事 白石恒明
会長 蒲池 壽

最近の知見に基づく麻疹の検査診断の考え方 (国立感染症研究所麻疹対策技術支援チーム作成)

参考文献:
IASR Vol.31 No.2(No.360)February 2010
IASR Vol.31 No.9(No.367)September 2010



- ※1 麻疹と臨床診断したら24時間以内を目途に保健所に麻疹発生届を提出し、それと同時に保健所を通して地方衛生研究所に検体を搬送する。取り扱う検体は自治体によって異なるため、保健所に確認する。
- ※2 発疹出現後8日以上経っている場合でも、麻疹ウイルス遺伝子は比較的長年に検出されるとの報告あり。麻疹に限ったことではないが、ウイルス感染症を疑った場合、その原因が明らかになるまでは、ペア血清での診断を可能にするため、急性期の血清の冷凍保管は、極めて重要である。
- ※3 1.21以上を「陽性」と判定している国内の検査キット(デンカ生研(社))での基準。麻疹含有ワクチン接種から8~56日の場合、麻疹特異的IgM抗体が陽性になる場合がある。地方衛生研究所に検体が搬入されていれば、検出される麻疹ウイルスの遺伝子型により、ワクチンによる反応か、麻疹の発症かを鑑別可能となる。ワクチンの場合は遺伝子型Aであり、Aが検出された場合は、麻疹発生届は削除となる。
- ※4 パルボウイルスB19による伝染性紅斑、HHV-6・HHV-7による突発性発疹、デング熱の急性期に麻疹IgM抗体が陽性になる場合がある。

PCR検査までのフロー

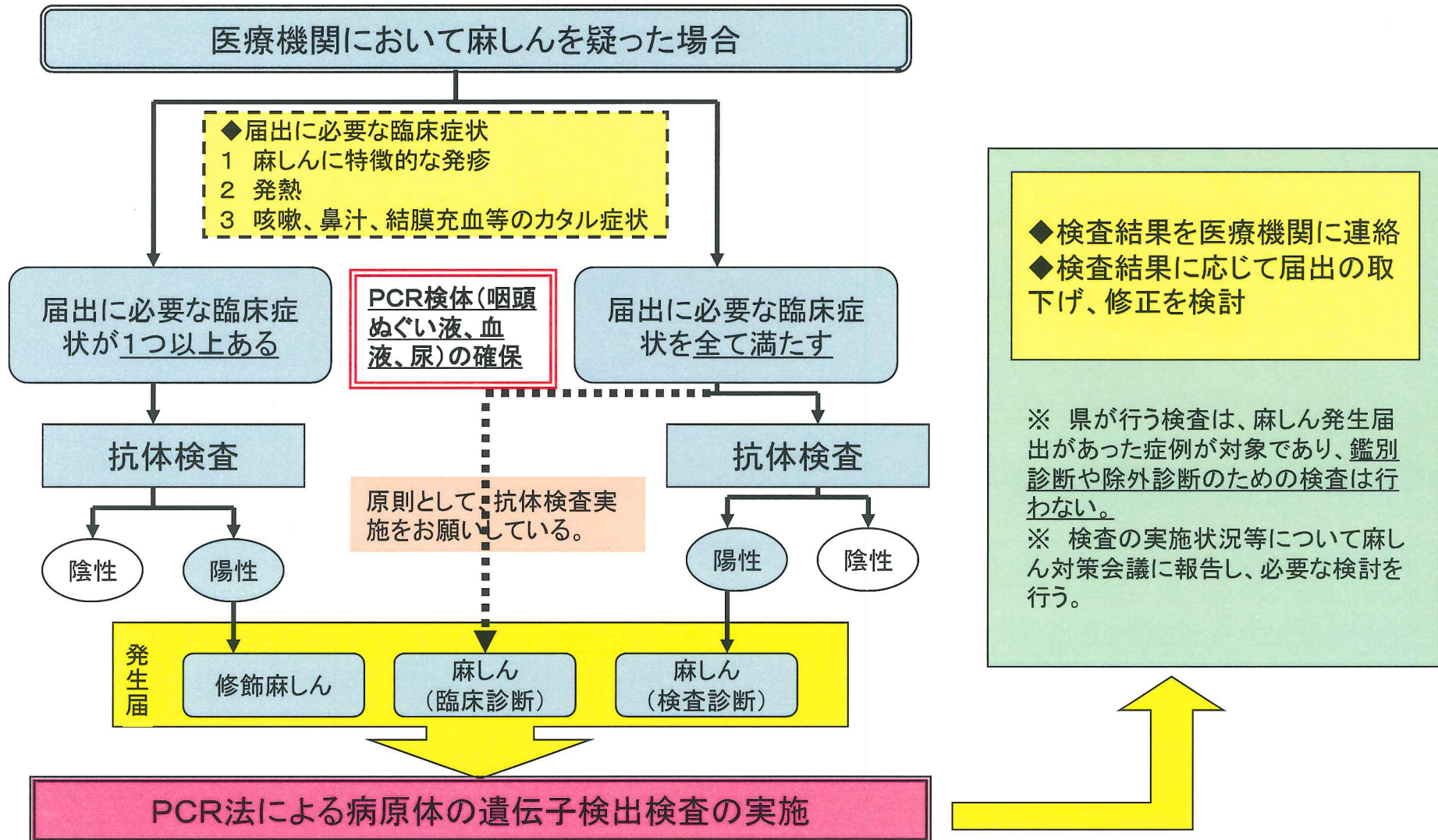
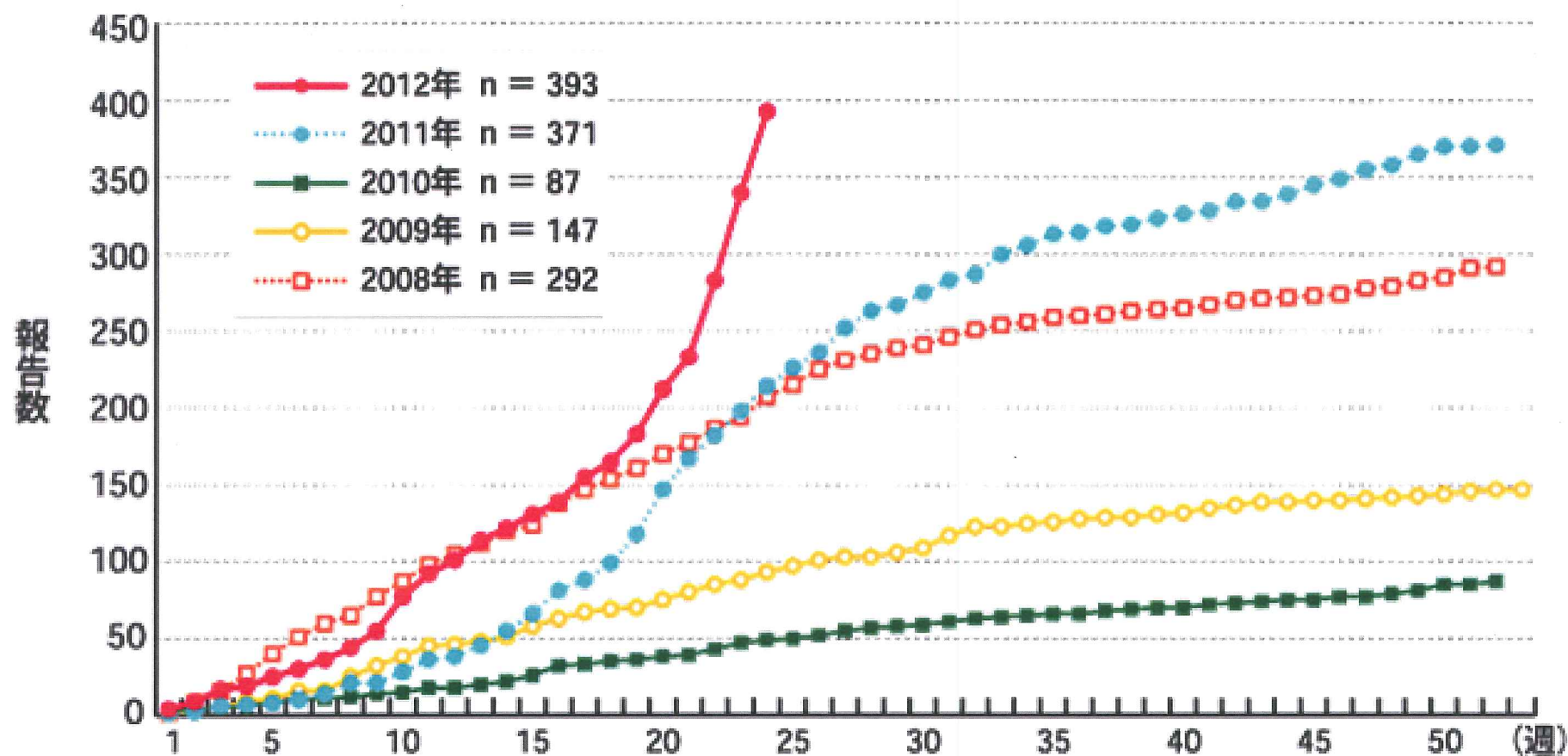


図. 風しんの累積報告数の推移(2008～2012年第24週)



3. 都道府県別病型別風しん累積報告数 2012年 第1~26週 (n=492)

Cumulative rubella cases by prefecture and methods of diagnosis from week 1 to week 26, 2012 (as of July 4, 2012).

■ Clinically diagnosed ■ Laboratory diagnosed

